

# 山崎郷土叢書

No. 85

7. 4. 30

兵庫県宍粟郡  
山崎町教育委員会内  
山崎郷土研究会  
電話 62-2000

## 長水軍記について

伊和神社宮司 安黒義郎

「乱世の

浮雲の上に聳え立つ長水城は寂として

茲に宇野下総守政頼は難攻不落の

天險を頼みとして立て籠る

雲霞の如き敵軍の襲ひ来るを物ともせず

枚をふくみて待ち居たり山時鳥血に叫ぶ

一声高き暁の夢を破りて麓原

早くも寄せ来る羽柴軍寄手搦手諸共に」

『長水軍記』により詠まれた琵琶歌「長水城」の冒頭のところである。天正五年（一五七七年）十月、秀吉は中国地方征討のため、京都を出発（日本歴史年表）黒田孝高に迎えられ姫路城に入り、ここを本陣として播磨・但馬諸城の攻略にかかり、十一月但馬の

### 目次

① 長水軍記について……………	安黒義郎…………… 1
② 宍粟郡の梵鐘集成 — 安富町の梵鐘 —……………	片山昭悟…………… 3
③ 明治維新の話(6)……………	堀口春夫…………… 11
④ 年貢米銀仮割帳(1) (尼崎藩庄屋文書)……………	久保寅夫…………… 15
⑤ 阪神淡路大震災と山崎町……………	河本雅視…………… 21
⑥ 義人時朝公の追悼詩……………	小川 登…………… 26
⑦ さざなみの滋賀の湖岸を訪ねて ……………	岸本正理…………… 27
⑧ 役員名簿……………	…………… 30
⑨ 事務局だより……………	…………… 32

岩州城・竹田城・八木城を攻略、十二月佐用郡に入り、福原城・上月城を破り、さらに龍野城主赤松広英を降伏させる。

天正六年二月以来足掛け三年にわたり秀吉と戦った別所長治の三木城が天正八年（一五八〇）正月落城・飾磨の英賀城と宍粟郡の長水城を残し、播磨を平定した秀吉は天正八年四月英賀城を完全に包囲し、攻撃の目標は播磨国で最後の抗戦の氣勢を挙げ続ける長水城に向けられたのである。

天正八年四月朔日の戦闘開始よりの合戦を記したのが、『長水軍

『記』で長水軍の縦横無尽の活躍、寡兵よく奮戦敵を悩まし、主従一体となつての城兵の防戦・作者は漢学の素養あり、『三国志』や『十八史略』・軍記物をよく読んでいたのであろう。用語はやや古びた宍粟特有の言葉ながら上手に使っている。大正十二年刊の『兵庫県宍粟郡誌』の長水城の記事は多くこの軍記を参考にしているようだ。

『長水軍記』は江戸時代に流行した軍記物にならつて書かれたもので、史料ではないが多くの郡民や縁故の人達に親しみをもつて読まれてきた物語である。長水城の最盛期は永祿から元亀の頃で、郡誌は揖東・揖西・宍粟及び但馬美方郡の内十万余石余を領したとある。軍記は次の記事からはじまる。

宇野家所領之事

「盛ナル者必衰 猛心モ終ニハ亡 又 風雲之塵ニ同シ 此ニ播州宍粟郡石保郷五十波村ニ 宇野下総守源政頼ト云者 揖西・揖東・宍粟・神西・但馬之内一郡 以上五郡ヲ押領シ其威近国ニ振フ 是ニ乗シテ所々ニ城郭ヲ責落シ 氏族家臣守レ之……」と斯くの如く本城周辺の諸城にも一族を配し守備体制を固めていた。

天正八年三月上旬秀吉の使者が長水城に来て服従をすすめた。返事を後日に延ばし、三月中旬政頼は敵対しない旨の返答に姫路城に出向いたが、秀吉は長時間待たせて合わず、政頼は怒って帰り、かくて秀吉の攻撃を受けることとなった。

長水攻めに参加した秀吉方の部将について、「軍記」は

「先勢一千騎荒木平太夫大将ニテ 林田通りヨリ向フ 次ノ一

軍三千騎小寺官兵衛孝高大将ニテ 髯崎ヨリ向フ 次ノ一軍一千騎神子田半左衛門大将ニテ 同林田通りヨリ向フ 後陣ニハ秀吉自 木村・竹中・石見・樋口其外大勢ニテ林田通ヨリ向ヒ給フ」  
 迎え打つ長水軍は宇野民部大輔祐清が千二百余の手兵を率いて秀吉のこの数千と狭戸松山の間で戦い、一時は大勝したが、秀吉の軍は日々援軍を増すばかり、祐清の軍は緒戦での善戦も空しく、秀吉の大軍のため押されて退き、林田松山城主の本郷宗祐・新宮香山城主香山秀明・政頼の弟政祐・五男祐光等も共に戦って退き、長水籠城を決し、五十波館に蔵せる金銀財宝を散じ、近村の百姓に命じて兵糧を長水城に集積し、防戦の準備を整えた。

秀吉は河東愛宕山(山崎町)に本陣を置き、四月二十四日から二十日にかけて五十波の構や清野の構を攻略し、出城篠の丸城をも攻略した。かくして長水城に迫り、連日激戦を重ね一か月余にわたり秀吉の大軍を悩まし続けた。

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

百神姫観光

〒671-25 兵庫県宍粟郡山崎町鹿沢68  
 (神姫バス山崎待合所内)

TEL (0790) 62-7588  
 FAX (0790) 62-7589

天正八年五月九日城兵の打って出た隙に、敵に内通していた謀反人等により火を放たれ城は炎上し、ために城主一族主従美作大原の新免宗貫を頼って都多谷を北上し、小茅野を経て千草まで落ちしが、敵の追撃もあり、折からの千種川の増水に渡り得ず、千草大森にて遙かに長水を伏し拜み、武運の尽きたるを告げ、最後まで従いし一族郎党遂にここに終り果てた。以上が『長水軍記』の大すじであります。

諸種の事由があつたとしても秀吉に対し、最後まで戦い続けた長水城主に対し兎角の評もあるが、『播磨鑑』は

「寔ニ宇野ハ勇士ノ本意有テ終ニ秀吉公ニ降ラス打死シケル事ヲ時ノ人感シケルトカヤ、長水の名は流さしや五月雨」とある。

#### ― 追 記 ―

事務局

平成七年度の本会総会を三月十九日(日)に本多記念館で実施しました。総会行事の後の記念講演では、一宮町伊和神社宮司の安黒義郎先生に「長水軍記について」と題して講話をしていただきました。安黒先生は昨年八月に『長水軍記』(5版五十七ページ)を復刊されていますので、その内容に詳しく、長水合戦の様子を軍記だけでなく考証を加えながら丁寧に話していただきました。そのうえ、参加者全員に先生の復刊された『長水軍記』をいただきましたことをご報告し、あらためて感謝申し上げます。

さて、本紙に掲載いたしました原稿は先生が昨年の夏に姫路市

で講演された時の資料として使われたもので、今回了解を得て登載させていただきました。

## 宍粟郡の梵鐘集成

### ― 安富町の梵鐘 ―

はじめに

片 山 昭 悟

江戸時代に金屋村鋳物師長谷川孫兵衛は、安富町においても喚鐘を製作している。

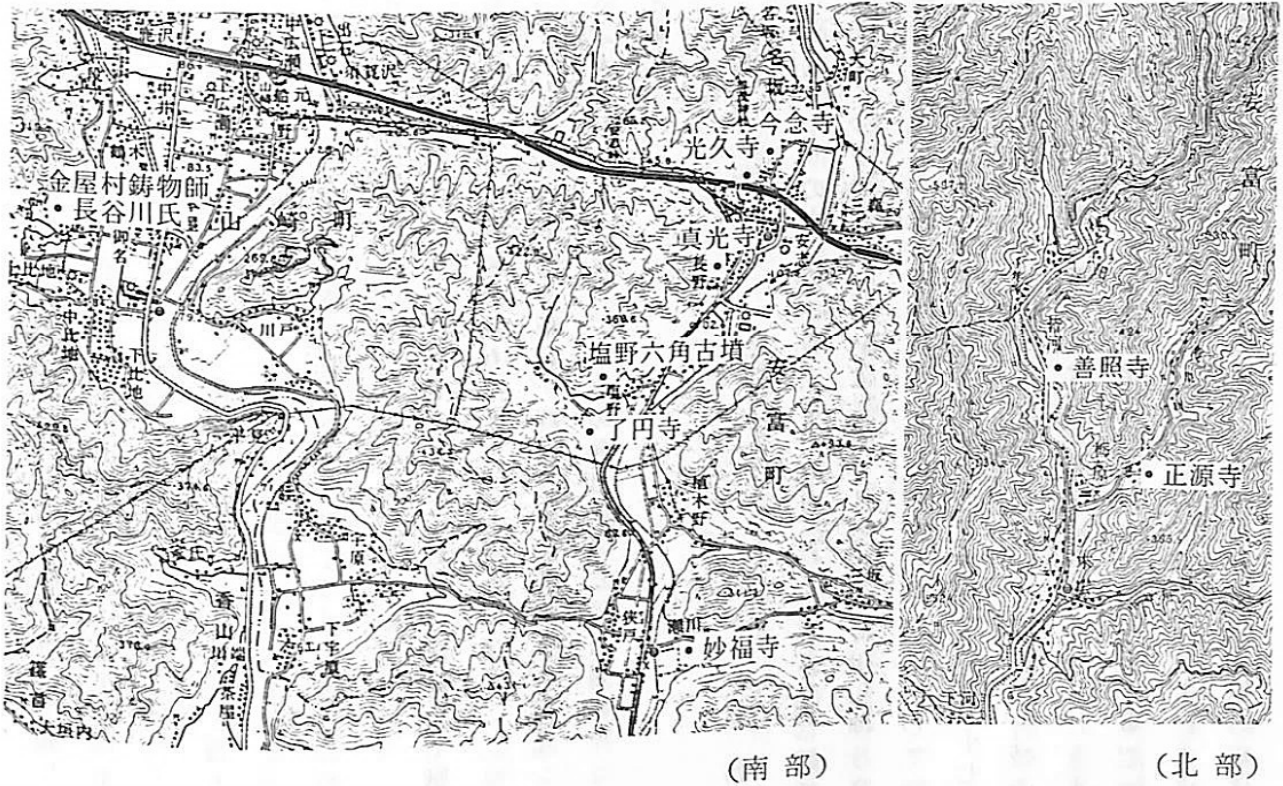
安志光久寺の鐘は天保十年(一八三九)のものであり、長谷川孫兵衛の代理で福岡氏が製作している。「長谷川孫兵衛」を刻む。

塩野了円寺の鐘は、寛政九年(一七九七)の長谷川孫兵衛のものである。この時期のものは多く現存している。江戸時代の長谷川氏を考える上で重要である。

長野真光寺の喚鐘は、大阪の鋳物師菅原安欲の鐘がみられる。名坂今念寺の喚鐘は、享保九年(一七二四)「安志庄」の銘がみえる。

瀬川妙福寺の喚鐘は、かつて三木の寺院にあった姫路田中氏の鐘であり、それぞれ特徴がある喚鐘である。

今回、宍粟郡の梵鐘集成をするにあたり、安富町における江戸時代の現存する喚鐘を中心にして概略を紹介する。



安富町寺院位置図

資料紹介 ◇光久寺喚鐘

安富町安志の松寿山光久寺は、真言宗醍醐派の寺院であり、国指定重要文化財の木造不動明王立像がある。

小笠原氏の祈願寺として知られる。

この光久寺の喚鐘は、天保十年（一八三九）の現存する鐘である。鐘銘によると

「勅許 鑄物師

長谷川孫兵衛

代 福岡休作

天保十己亥年

九月吉日」とある。

これから長谷川孫兵衛が作ったものではなく代理の福岡氏の作であることがわかる。

天保十三年（一八四二）四月二十一日に御形神社の鐘を、孫兵衛代理の伊三郎がつくっている。

天保十年頃の長谷川氏は、鑄物師として激動の時期であったように思われる。

天保十一年（一八四〇）十月には、長谷川五郎兵衛より鑄物師の権利が移っていることから、長谷川氏に係わりのある福岡氏が製作したものであろう。

福岡氏については、さだかではない。

速断はできないが、山崎町御名・川戸に福岡姓もみえる。御名の小字「鍋ヶ甫」があり、かつて鍛冶屋が存在していたとされることから、これらに関連するのではないかとも思われる。

喚鐘は、池の間に飛天像が陽鑄される68cmのやや大きなタイプである。なお、長谷川氏の中で飛天像がみえるものに、長谷川孫兵衛藤原恒光作の天保二年（一八三一）南光町上三河・光福寺喚鐘がある。

また、銘文にみえる銀屋ならびに種屋は、安志の町人である。

光久寺喚鐘銘

松壽山 光久寺

現住 龍道 代

鐘替世話人

現銀屋 辰蔵

種屋 卯之助

勅許鑄物師

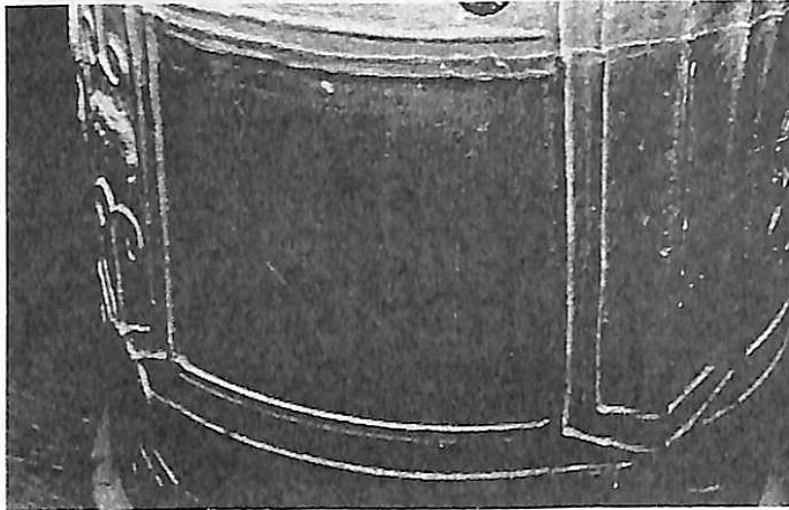
長谷川孫兵衛

代

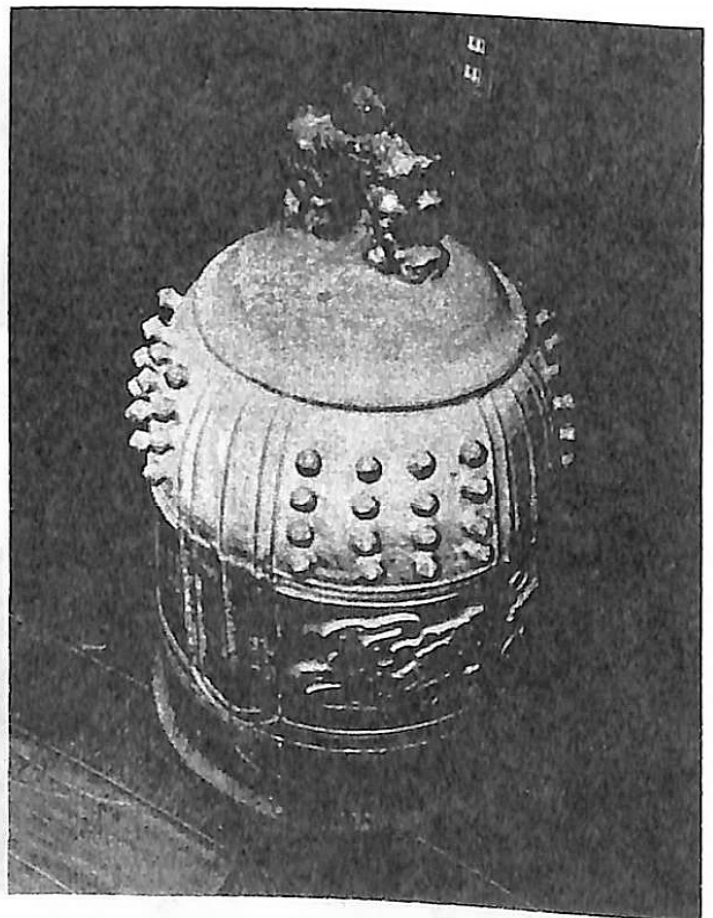
福岡 休作

天保十己亥年

九月吉日



光久寺鐘（池の間）



光久寺喚鐘

◇今念寺喚鐘

名坂の長慶山今念寺の喚鐘は、享保九年（一七二四）の作である。鐘銘には「完栗郡安志庄名坂村」と陰刻されている。「安志庄」の銘が残っているものである。ただ、治工名はみあたらない。この鐘は鑄型継目がよく目立つ鐘である。

享保のころ宍粟郡の作には、山崎町明源寺喚鐘が享保六年（一七二一）である。治工は姫路京口小野六太夫である。

今念寺は、天台宗寺院であり、兵庫県指定文化財石造五重塔がある。



今念寺喚鐘銘（安富町名坂）

奉新調瑠璃殿梵鐘

播陽完栗郡安志庄名坂村

長慶山今念台寺

當住重勝院實遵

本願檀首吉田伊左衛門清知

助力千人講衆

千時享保第九甲 辰年二月吉良日

今念寺喚鐘

諸	是	生	寂	願	普	我	皆
行	生	滅	滅	以	及	等	共
無	滅	々	爲	此	於	與	成
常	法	已	樂	功	一	衆	佛
				徳	切	生	道

◇真光寺喚鐘

長野の浄土真宗寺院・安養山真光寺喚鐘は、宝暦十二年（一七六二）「冶工菅原安欲」の作である。

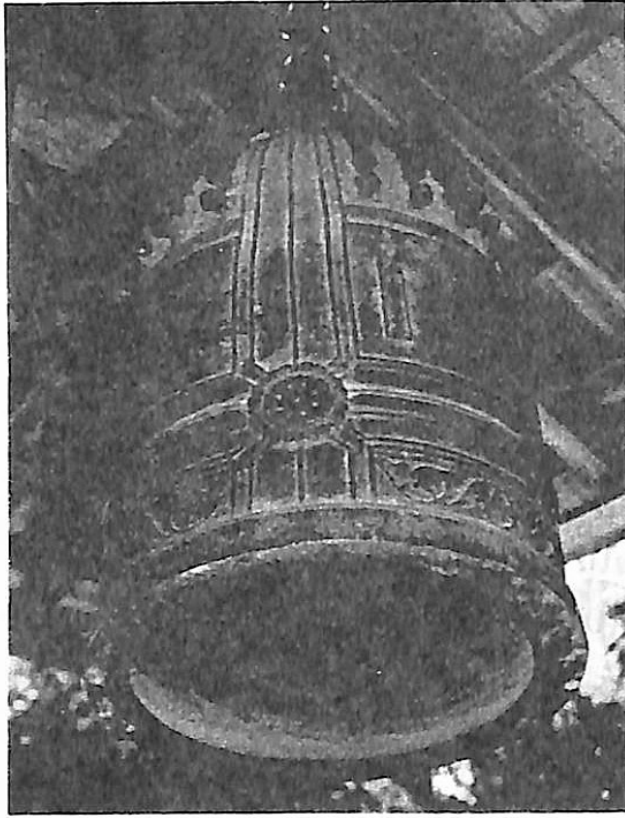
「冶工菅原安欲」と陽鑄されるのが特徴である。

菅原安欲の鐘は、千種町西蓮寺の宝暦十三年（一七六三）鐘にみえる。真光寺鐘の翌年にあたる。

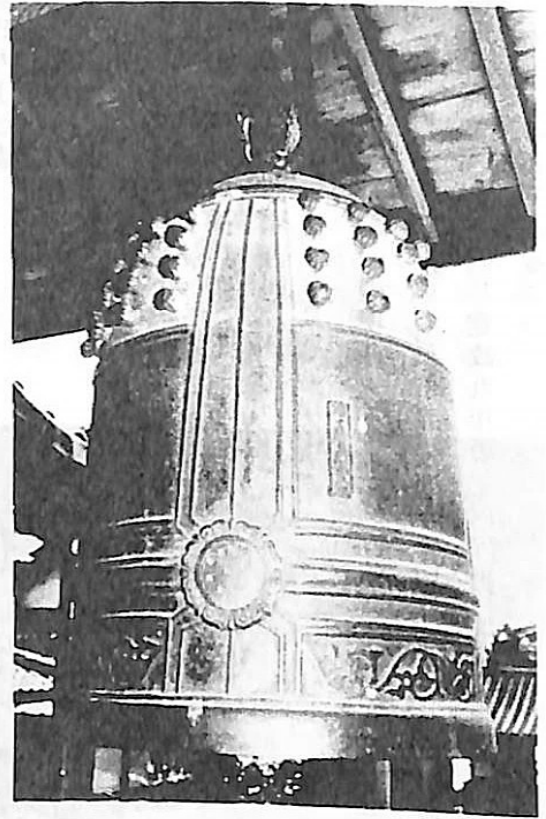
坪井良平氏の『新訂 梵鐘と古文化』ビジネス教育出版社（一九九四）によると、菅原安欲の名は大阪鑄物師とされている。



今念寺鐘撞座



西蓮寺喚鐘 (宝曆十三年)



真光寺喚鐘 (宝曆十二年)



了円寺喚鐘

石工菅原忠欽

宝曆十二年九月

長野真光寺喚鐘  
播劬完栗郡長野村  
真光寺



真光寺鐘撞座

◇了円寺喚鐘

塩野の禅住山了円寺喚鐘は、寛政の頃多くの長谷川氏の作がみえる。(表1)

了円寺喚鐘銘  
播州宍粟郡塩野邑

了円寺常什物

現住 智證

先願主 同邑

吉左衛門

再建願主 狭戸邑

清太夫

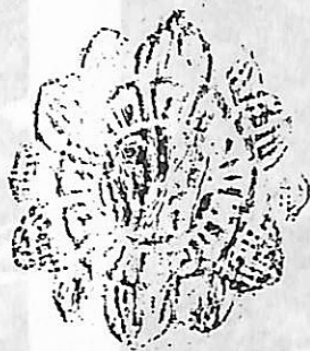
寛政九丁巳歳

二月 日

同郡住

治工 長谷川孫兵衛

藤原吉則



了円寺鐘撞座

寛政九年(一七九七)の現存する小茅野位尾神社の梵鐘、寛政六年(一七九四)千種町千草の長永寺の鐘銘には、「勅許御鑄物師」が使用されている。同じ寛政九年の了円寺鐘は「勅許」がみられず「治工」のみである。

(表1) 江戸時代寛政の頃

長谷川孫兵衛藤原吉則作梵鐘・喚鐘

元号	西暦	梵鐘	喚鐘	存否	治工名	寺院・神社名
寛政元年	一七八九	○	○	存	治工 當郡住 長谷川孫兵衛 藤原吉則	山崎町船元 一雲寺
寛政四年	一七九二	○		否	鑄工 同郡金屋村 長谷川孫兵衛藤原吉則	一宮町伊和 神福寺
寛政六年	一七九四		○	否	勅許 御鑄物師 當郡金屋之住 長谷川孫兵衛藤原吉則 長谷川五良兵衛藤原家次	千種町千草 長永寺
寛政九年	一七九七	○		存	勅許治工 當郡金屋村住 長谷川孫兵衛尉 藤原吉則	山崎町小茅野 位王神社 (尾)
寛政九年	一七九七			存	同郡住 治工 長谷川孫兵衛 藤原吉則	安富町塩野 了円寺

「勅許」とは、朝廷より許可された鑄物師である。安富町で長谷川氏の現存している唯一のものであり、優秀な鐘である。

了円寺は寛政六年(一七九四)に本堂、鐘楼が火災に遭っている。



三年後の寛政九年再建された時に鐘が作られたものと考えられる。

なお、草の間にみえる唐草紋は、天明六年（一七八六）の波賀町安賀満願寺喚鐘と同タイプの鐘である。

なお、全国で初めて六角形古墳とわかった塩野六角古墳は、塩野字岡ノ上の標高一五〇メートルに位置する。

◇ 妙福寺喚鐘

瀬川 浄土真宗・日動山妙福寺の喚鐘は、弘化二年（一八四五）の現存する鐘である。

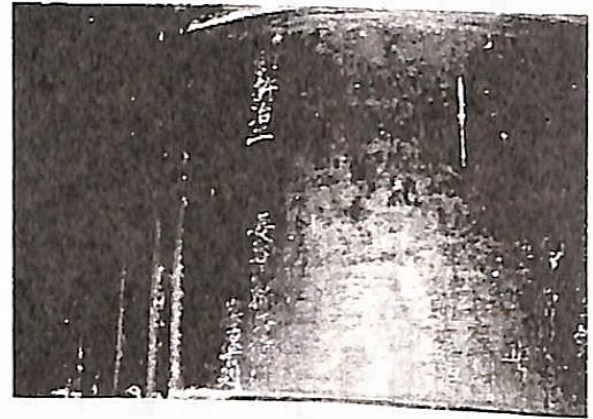
「姫路 田中鑄之

維時

弘化二己巳年

秋八月八日」とある。

治工は、姫路野里鑄物師田中氏の鐘であり、鐘銘によると



位尾神社梵鐘

「播磨三木郡

吉田村

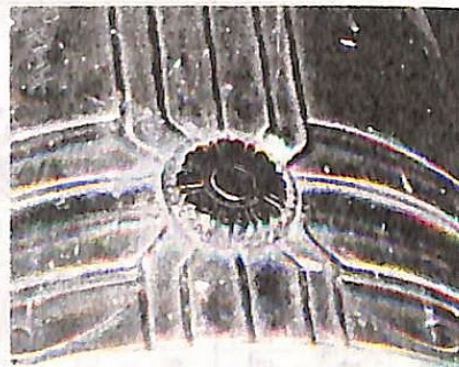
妙覚寺什物」とある。

法量は総高71 cm・鐘身50 cm・笠形6 cm・龍頭15 cm・口径40.2 cmを測る。乳は四段四列、草の間は唐草紋、復弁八葉の蓮華紋の撞座が二ヶ所にみえる。喚鐘にしては宍粟郡内では大きいタイプである。

なお、姫路野里鑄物師の田中氏は、村内政雄「由緒鑄物師人名録」『東京国立博物館紀要七号』（一九六八）によると、田中吉十郎・田中五郎兵衛・田中五郎右衛門などの名がみえる。



妙福寺喚鐘



妙福寺鐘撞座

◇正源寺喚鐘

栃原の浄土真宗・板倉山正源寺喚鐘は、明治三十六年（一九〇三）八月に鑄替されているもので、鐘銘によると、正徳四年（一七一四）とされる。

◇その他の参考資料

『安富町史』によると、奈良県斑鳩町法隆寺食堂にある鰐口は、文明十一年（一四七九）の室町時代のものであり、もと安志庄の野村貴布祢社のものであったことがわかる。

銘文は

白 播劬宍粟郡安志庄内野村貴布祢社

敬 干時文明十一季己亥八月十日祈念諸願成就

おわりに

安富町の半鐘については、『安富町史』にくわしくまとめられているので参考にしていただきたい。

なお、安富町はじめ宍粟郡の梵鐘集成については、安富町皆河・善照寺住職建部惠潤先生より御指導をいただいたことから先生の傘寿を記念し、研究資料として紹介させていただきました。

(表2) 安富町喚鐘計測表 (1995.3.4調べ)

寺院	光久寺	今念寺	真光寺	了円寺	妙福寺
総高	68	66	62	56	71 cm
鐘身		49	41.5		50
笠形		5	5		6
龍頭	15	12	15.5		15
口径	41.3	38.7	33.5	34	40
口辺厚	4.8	3.5	3.3	3.3	4.0
乳段列	4×4	4×4	4×4	4×4	4×4
撞座	複弁八葉蓮華紋	複弁八葉蓮華紋	複弁八葉蓮華紋	単弁八葉蓮華紋	複弁八葉蓮華紋
江戸年号	天保10年(1839)	享保9年(1724)	宝暦12年(1762)	寛政9年(1797)	弘化2年(1845)
冶工	長谷川孫兵衛代福岡	無	冶工菅原安欲	長谷川孫兵衛藤原吉則	姫路田中氏
特徴	池の飛天像	草の唐草紋	草の唐草紋	草の唐草紋	草の唐草紋

## 明治維新の話(6)

堀口春夫

明治四年七月山崎県を廃止し、姫路県となる。知事の本多忠明は御役御免となり、近く東京へ移住を命ぜらる。藩庁は県の民政出張所となる。その頃領内は明治二年以来の両作不熟で、明治三年も引続き不作のため、天保以来三十年来の大飢饉となり、農民の生活は難渋し極難の者には各所にて施粥のほどこしがなされた。町内でも大雲寺でお椀を持った貧民の行列が長く列び粟粥をいばいずつもらったと言う。また、九月初めには大風が吹き、潰れ屋が多く出た。しかも明治四年始めより諸色高値となり庶民の生活は苦しくなる一方であった。

かかる時、藩主は九月に東京移住となり、九月八日は「お殿様御隠居様」が最後の領内村廻りをなされ、庄屋始め村役人達へお別れの言葉があった。大庄屋には形身の道具まで下された。また、九月十日には家中でも旧知事のお別れの会が催され、士族以上の者は庁内大広間にて、それ以下の者は仕丁に至るまで家中会所にてそれぞれお別れの言葉があり形身の品や道具などが下された。二百数十年来の長きにわたり忠節を尽くしてきた家臣にとって「君臣の情やみ難く、嗚咽の声しきりにして忍び泣く者も多かりし」と言う。九月十三日には明け六ツ時「御殿様御隠居様」発駕

にて臣下の者は船元まで見送り、隨身の士は大参事武間利庸を始め元定府の士十数人であった。かつての参勤交代とは様変わりし、まことに寂しい次第であった。奥方様は二月遅れて十一月十八日に発駕なされたと言う。

十月三日は新政府派遣の民政様より藩政時代寺社に寄進していた田畑は太政官命令により新政府に取上げとなる。前年発令された廃仏毀釈、神仏分離の例にならない十月申元姫路支配所播州一円に百姓一揆強訴の風聞ひろがる。加古川流域にて打ち壊しがあり、鎮庄のため政府出張所の役人が強行手段として大砲を撃ち込み、徒党の者達数人が死傷したという噂がひろがった。十月十七日郡内神戸谷付近が騒がしく、「強訴の下相談致し居る」との木ノ谷より届け出があった。また、二十日頃には岸田矢原両村にても「農民相寄り」強訴の相談をしたり、夜は篝火を焚き、追々人数を増し二百人から三百人とも言い、筵旗を押し立てて

表装全般・新調修復

…古いものを大切に…

表具師 松本永昌堂

山崎町鹿沢本通り  
TEL62-0122

氣勢を上げていくとの「風聞これ有り」と、川東鳩屋より内々注進があった。山崎民政局は大庄屋庄又十郎や出石三木彦十郎に命じ、矢原へおもむき説得させ、一旦引き取らせさせたが、またしても、三谷口にて篝火を焚き、不平の農民大勢宮山に呼び集め、一人の浪人が盛んに檄を飛ばし一揆を扇動しているとの知らせがあった。以下は後世ある古老の物語った当時の様子である。

この騒動は、扇動した主謀者平山伝蔵の名を取って平山騒動と言う。平山伝蔵は元平山伝左衛門と言つて山崎藩町奉行所付きの定廻り同心であつたが、ふとした事で同僚と喧嘩して口論のあげく相手を斬つたので、奉行はその罪により平山の役を免じ、領外追放を命じた。平山は剣術杖術十手術共にすぐれた剛の男であつたが、追放されてからは虚無僧となり、諸国を放浪中、幕末動乱の中で多くの浪士と交わつたり、維新後は普化僧寺に寄寓し、幕府崩壊でお払いばことなつた公儀の庭番や黒鍛者と語り、「永い間封建制度の中で苦しめられた農民が待ち望み久しき御一新となつて開放され、天からお札が降つたと喜びに踊り狂つたのも束の間、世の中は一向に改まらず、新政府の年貢取り立ては一層厳しくなり、それに加えて連発される諸制度の变革に諸民は驚くばかり、しかも維新以来打ち続く不作に国中は大飢饉が到来し農民は苦しむばかり、今こそ吾々は農民の味方となり彼等を激励して一揆を企て、太政官を転覆さす機は今此処に有り」とばかりに多くの虚無僧達は普化僧寺をあとに思い思いの諸国へ潜入して行つた。平山は仲間と共に播州一帯に入り、仲間と手わけして、政府の出先機関と

なつた藩庁を恨み、生れ故郷に近い揖保川沿いの村々を奥むきから順々に遊説して廻つた。始めは廃仏毀釈になつて田畑を取上げられた祈祷寺や、小さなお宮に立ち寄り、飢えに苦しむ貧農を呼び集め、尺八を吹いて聞かせたり杖術を披露したり、面白い世間話を聞かせ言葉巧みに近づき、段々人が集まると、世情を嘆き、藩閥政府の政治を誹謗し、「御一新で世の中の暮しが楽になるどころか金策に窮した政府は年貢の取立てを厳しくする一方だぞ、今お前達が団結して強訴せねばいつ良くなると言ふのだ、裕福な庄屋共は新政府にしつぽを振りお前達の味方ではないぞ……」段々と人数が増えてくると次第に川下へくだつて行き、城下が近くなると中には強訴の罪の恐ろしさに尻込みをして引き返す者もあつたが、彼はこれを督励し、川東三谷口まで来ると宮山に立て籠り、そこら一帯に篝火を焚いて氣勢を揚げ、戸惑う者は呼び返し激励して言うのに、

「お前達は徳川三百年の長い間領主や天領の代官に年貢を収奪され、待望の御一新となつても年貢は一向に下がらない。明治二年以来不作不熟の為未曾有の大飢饉となり、お前達の生活は難渋し、村々は疲弊困憊その極に有り、これに対しお上の施粥と言つても水で薄めた粟粥一碗、それでお前等是我慢が出来たのか……庄屋共は新政府の民政様に諂らい、お前達の味方とはならず、逆に説教して、なだめようとする。今一揆に立ち上がらねば何時機会が有ると言うのだ、勇気を出せ……今が絶好の好機であるぞ……。今藩主は人質として東京に呼び集められて

いる、中心を失った士族達は失業して先行に戸惑っている。今の藩は弱腰だ、今こそ強訴の好機であるぞ。人数が増えれば先ず最初に出石の代官所を襲い強訴状を突き付け、言う事を聞かぬ時はこれを血まつりに上げ、その勢いに乗じていっきに川を押し渡り、出石の米蔵を押収し、町へ乗り込み豪商の金蔵を開放して諸民にばらまき、町民も味方に付けば上の山に立て籠り、民政局の官員に強訴状を突き付ける。訴状は表向きの建前じゃ、民政局はおそらく条件を聞くまい。その間にお前達は土堤を乗り越え武器庫に押し入り、鉄砲を押収して陣屋を占領する事も不可能ではない。要はお前達の勇気じゃ、力だめしじゃ。決死の意気込みにあるぞ、そのうち拙者の同僚も諸国に潜入して一揆を扇動している。主人を失った旧藩士は今途方にくれている、あわよくば諸国の失業士族の不満が暴発し我等に加担すれば天下をひっくり返す事も出来るのだ。永い間雌伏していたお前達百姓のど根性を發揮せよ」

と弁舌たくましく扇動し、組頭の中で能筆の者は檄文を書いて村々に廻状し、「男と云う男を皆呼び集めよ、三百人以上になればこれを決行する」と言った。しかし、中には事の起こりの重大さに恐れをなしてひそかに密告する者もあった。川向うの民政代官小針忠太左衛門・杉尾慎一郎等はこの噂を聞いて山崎の家中へ避難した。大参事の武間利庸は旧知事のお供をして東京に出府の留守中であるため、権大参事の橋保等は昔からの仕来たり通り、隣藩へ加勢を頼み、大属(元奉行)児嶋武信は元藩兵隊士に命じ出石河

岸に円石隊鉄砲組を伏せ置き、積水隊の中で腕に覚えのある剣士二十人ばかりを選んで、笹倉直臣にこれを指揮させ十月二十二日夜明け前に隠密裡に中村の主謀者の寝ぐらと覚しき屋敷に近づき、抜刀して、「平山、出ませい……」と斬り込んだ。しかし、平山伝蔵はいち早くこれを察知したものと見え寝床はも抜けの空、彼は禪ひとつで衣類を抱えて裏山に逃げ込んだと言う。裏に出てみると藪で竹を斬る者あり、篝火の側で竹槍の先を焼いている者あり、「御用改めであるぞ」と声を掛けると、小前百姓共は蜘蛛の子を散らす様に逃げ出したと言う。逃げ遅れた百姓をつかまえて「何をしている」と聞くと

「わし等は平山の旦那の言う通り竹槍と竹束を作って鉄砲弾の楯を造っているだ」と言った。しかし、拔身の刃を見ると腰をぬかさんばかりに平伏して命乞いをした。誰に聞いても、「わし等平山の旦那のいう通りにしただけで何もしんねえ」と言う。「此の中に組頭は居らぬか、その者を呼べ」

HOME CENTER

アガロ

店 店 店  
用 崎 穂  
佐 福 赤  
店 店 店  
崎 野 郡 子  
山 龍 上 太

と命ずると、薄闇の中から恐れながらしぶしぶと、数人の男が出て来た。「お前達の言い分を申せ、騒ぎの理由があるであろう」と糾すと一人の男が頭を上げ「おらあ岸田村の忠平と申す者でございますが、実は先日より平山の旦那の強制により、仕方なく斯様な訴状を書きました」と恐る恐る差し出した。「何卒何卒御穩便にお聞き届けの程を」と哀願した。

恐れ乍ら歎願仕奉り候事

一、御殿様御帰還の事 御答え 御隠居様御演説の通り

一、御年貢三割引 御答え 御隠居様申立つべき事 御演説の通り

一、両御蔵 米豆納め方に付 直しめなし 手直しに仕り度

御答え 聞届け候事

一、糖菓御止め下し成され度、御答え 御隠居様御演説の通り  
精々申立つべき事

一、畑林栗林御見分けなしに 勝手に伐取り申し度 御答え

聞届け候事

一、店方諸代品物米値段 引格に値段下げ仰付けられ度 御答

え 聞届け候

明治四年辛未年十月二十一日

総代 岸田村、久保忠平

総代 矢原村 小坂作二郎

〃 三津村 嶋津治郎七

御役所様

参考文献(公私用日記、諸願書控え帳より)

総代 山崎村 高野武平

〃 宇原村 志水九平治

笹倉甚左衛門直臣はこれを開いてひと通り目を通した。が、「うむこれは此場で決着できるものでもない。後日必ず吟味致すであらう、しかと受け取った」と懐ろに入れた。その頃には夜は既に明けていた。そこへ大庄屋三木彦十郎、庄又十郎等が、先頭に、火消とんび、捕手合せて八十余人が高張提燈を押し立て召し捕りに参ったので、逃げ去った者は追はず、高所、中村にて二十一人召し捕り、民政局役所に連れ戻った。大属(元奉行)児嶋武信等数人列座で刑法により吟味された。そして頭取の者六人は入牢申付け、残りは一応釈放された。この騒ぎに隣藩三日月藩を始め安志藩は須賀沢まで龍野藩は川戸まで、総勢二百人ばかり加勢に出向いたと言う。

明治四年十一月民政局山崎第三出張所長に小国英定が就任した。

また、明治四年十二月姫路県を廃し飾磨県となり、権令に元鹿兒島県士族森岡昌純が就任した。なお、平山騒動については当時の有様を見聞した古老の談によれば、出石の蔵下に大砲三門を備え付け、出石河岸十二ン波から、空戸の川番所北辺り迄で鉄砲隊を伏せていたと語った。また、平山は翌明治五年六月頃、川東高所、中村あたりの大工の工房に立ち寄っているとの保長通報により、

第三出張所小国英定は、監察属(元同心)に命じ捕手等三十人ばかりを召し捕に出向かせ、六手に分けて包囲した。しかし、工房には居らず近くの家をいちいち改めるうち安蔵の家に居ることがわかった。かくまっていた大工下働きの安蔵は、以前に平山の配下で鴻ノ口木戸番所で杖突番人をしていて関係で顔見知りの捕手が家改めに来たのを見て、安蔵は「旦那、早く逃げて下せい」と言ったが、伝蔵は「なあに：久方ぶりにひとあばれしてみるか」と、安蔵が大事に保管し壁に掛けていた六尺棒を借りると表へ出た。御用捕手の多くは、元同心平山に杖術を習った連中で、伝蔵の腕前を良く知っているだけに、平山が六尺棒を構えて「さあ来い：」と言うと、皆尻込みして近づこうとはしなかった。剛の者伝蔵は「さあどうした：：：何だ来ぬのか：：：さて来ぬという事は、つまり去れと言う謎か？」捕方の中には、こくりとうなづく者も居た。「ふん：：：不甲斐ない奴等め：：：」と彼は悠々と立ち去ったと言う。だが、かくまった安蔵は召し捕られた。しかし飾磨県権令へは山崎第三出張所の手前主謀者某は召し捕ったと報告されている。平山はその後数年して山崎に戻り、今宿に住み、尺八の師匠をしたり、また虚無僧姿でこの地方を流し歩いていたと言う。昭和の初め頃はまだ平山伝蔵を知った人もかなりいた様で、中には彼を義民の様に言う者もあった。

(平山騒動後聞記)

## 年貢米銀仮割帳(1)

— 尼崎藩庄屋文書 —

久保寅夫

山崎町宇野は江戸期から明治初年までは、上町と中町とに分かれていた。揖保川の支流伊沢川の左岸。地内の背後にある長水城の大手に当たって、武士・町人の住居が集まって町場を形成していたところである。「正保郷帳」には伊沢の上町と見える。始めは姫路藩領、元和元年山崎藩領、延宝年間幕府領、林田藩領、大阪城代内藤氏領、姫路藩預り地、京都代官支配、三日月藩預り地、大阪、生野、倉敷代官支配と、変遷して明和六年から摂津国尼ヶ崎藩領となる。

会報に載せている「尼ヶ崎藩庄屋文書」は、ほとんど幕末期のもので、それ以前のものはない。おそらく襖の裏張りや、竹の籠等に張ったり、その他のものに使用したものらしく、藤兵衛が当主になってから保存したものと推察できる。これと言うものはないが、宗門改、入会権をめぐる文書、年貢米銀仮割帳などがある。特に出石の庄屋三木律助方宅にて記録した文書は、揖保川の高瀬舟に係して貴重なものと思われる。

高瀬舟に係したものは、次の通りである。

「御年貢米大豆割印帳」 「御年貢米大豆納勘定船積覚帳」 「御米大豆門着覚帳」 「運状之事」 「送り状之事」 「覚」(尼御米) 龍野

船方御番所に送った揖保川通行願「出石河岸詰御中諸入用覚帳」  
今回紹介する「年貢米銀仮割帳」は安政六年の仮割付帳です。

安政五年 上町村

午御年貢米銀仮割帳

十一月 庄屋

藤 兵衛

三銀納直段

一拾分一 九十五匁七分三厘六毛

一九分一 百三十八匁式分壹厘三毛

一御口米 百四十三匁式分壹厘三毛

入方

御普請被下米銀□□

一米三斗式升

午年分  
普請ニ被下分

一〃三石七斗四升五合己年普請立会分

凡百三十五  
被下

代銀五百四拾八匁七分七厘

一銀五拾式匁

被下

合五百八拾七分七厘

内分

七拾五匁式分

己へ□□被下分

五百五匁五分七厘

居村持杯毛附之割

壹石ニ付式匁八分壹厘五毛ノ

壹厘ハケス

午年仮割元揃

上町村

一高式百拾八石八升三合

内

九升三合

全戻敷引

三石九斗七升九合 田畑請引高

差四石七升式合

外ニ 壹斗三升七合 不足高之分引

残高式石拾三石八斗七升四合

内四石五斗七升八合 上之上田引

式百九石式斗九升之合

分

四匁七分八厘七毛六

式百九石五合 本免

取米九拾九石八斗四升壹合

式斗九升壹合 壹っ取

取米式升九合

殿米合九拾九石八斗五升

分

九石九斗八升五合

拾分一大豆



内 四石九斗九升式合五勺 正大豆  
四石九斗九升式合五勺 御銀納

代 銀

右九十五匁七分三厘六毛  
九石九斗八升五合 九分一銀納

代 銀

外二 七拾九石八斗八升 米納  
式石九斗九升六合 御取米銀納

代

外二 米四石七斗九升八合 夫米式匁壹分

凡壹石八斗八升 川下戾敷

米納合八拾六石五斗一升五合

此分残壹附之割

但シ壹石四斗一升

銀方先割

本石九拾五匁七分三厘六毛 御銀納

一拾分一九石九斗八升五合

代銀九百五拾五匁九分式厘

本百四十三匁式分壹厘三毛

一九分一米九石九斗八升五合 九分一銀納

代銀壹貫三百八拾目六厘

本百四十二匁二分壹厘壹毛

一御口米式石五斗九升六合 御口米銀納

代銀四百廿九匁七厘

三口 式貫七百六拾五匁五厘

外二

一凡八百六拾目 大庄屋表掛物当

一 百九拾目 定例物当

一凡七百目 村入用当テ

一本拾匁三分壹厘 去己年分六ヶ割  
仮入ニ付不足分

一本三拾三匁四厘 □反割仮入ニ付不足

此分三匁三厘

外二 七匁 右ノ外已割二七十目  
入分半年分

惣口合四貫五百七拾目七分六厘

外二 百目 コノ分新用当テ

内

五十七匁 通五十七軒分

凡四十五匁 人別ワリ三分づつ分引

式匁 又四分荒年亥引

八十九匁式分式厘 入作三匁うけまし

差 百九十三匁式分式厘

四貫四百七十七匁五分四厘

残毛ニ附式百九石式斗九升六合之割

壹石ニ付居村廿壹匁四分八厘

入作八廿四匁四分八厘

庄屋 藤兵衛

一高三石五斗四升九合

内

式升壹合

荒引

九升三合

全屋敷其時之庄屋ニ付儀分

壹升八合

同断

差壹斗三升貳合

残高三石四斗壹升七合

分

三石壹斗貳升六合

本免

米成壹石貳斗八升二合

貳斗九升壹合

壹っ取

米成貳升九合

米成 八 壹石三斗壹升壹合

内貳匁八分林付下町久兵衛より入ル

一銀拾匁九分

○小もの成

一〃七拾五匁五分

先割

一〃貳匁五分

○通人別

八拾八匁九分

入貳百八十八匁四分八厘

○去過之分

入九匁九分壹厘

米銀取分

年寄 吉右衛門

一高六石貳斗壹升九合

内

壹斗一升壹合

荒引

残高六石壹斗八合

内

壹斗五升三合

上田引

五石九斗五升五合

米成貳石四斗四升貳合

一銀壹匁九分五厘

○小もの成

一〃百廿五匁壹分

先割

一〃貳匁五分

○通人別

一〃百三匁四厘

○去不足之分

八 貳百三拾貳匁五分九厘

友吉

一高三石六斗五升貳合

内四升引

残高三石六斗壹升貳合

内六升六合 上田引

三石五斗四升六合

米成壹石四斗五升四合

内

一 銀三匁九分三厘 ○小物成り

一 〃七拾五匁九分 先割

一 〃式匁五分 ○通人別

〳八十式匁三分壹厘

入九匁九分六厘 米銀取分

丑之助

一 高三石九斗五升九合

内 八升八合 引

残高三石八斗七升壹合

内 壹斗四升八合 上田引

〳三石七斗式升三合

米成 壹石五斗式升六合

内

一 銀式匁四分四厘 ○小もの成

一 〃七拾九匁七分 先割

一 〃式匁八分 ○通人別

一 〃式百八匁五分式厘 ○去不足之分

入拾匁四分六厘 ○米銀取分

甚七

内 高壹升七合長藏より入る

内

一 高拾六石四斗式升三合

壹斗四升九合 引

三升四合

残拾六石式斗四升

内 四斗九升壹合 上田引

〳拾五石七斗四升九合

米成 六石四斗五升七合

内 一 銀拾壹匁三分八厘 ○小物成

一 〃三百三十七匁 先割

一 〃式匁式分 ○通人別

〳三百五拾目五分八厘

入百六拾九匁九分九厘 ○去過之分入

入四十式匁式分五厘 ○米銀取分

梶藏組

源次郎

一 高壹石壹斗式升八合

内 壹升四合 引

残高 石壹斗壹升四合

内 三升貳合 上田引

石 八升貳合

米 成四斗四升四合

内

一 銀九分九厘

○ 小もの成

一 〃 廿三匁貳分

先 割

一 壹匁三分

○ 通人別

〆 廿五匁四分九厘

入 拾匁七分四厘

○ 去過之分入

入 三匁四厘

○ 被下米代

萬右衛門

一 高貳石九斗三升七合

内 貳升七合

引

残高 貳石九斗壹升

内 七升

上田引

〆 貳石八斗四升

米 成石壹斗六升四合

内

一 銀八匁八厘

○ 小物成

一 〃 六拾目八分

一 〃 壹匁六厘

○ 通人別

〆 六拾三匁八厘

入 三拾九匁貳分

○ 去過之分入

入 七匁九分八厘

○ 被下米代

伴 治

一 高三斗五升七合

米 成石四升六合

一 銀七分六厘

先 割

一 〃 壹匁九分

○ 通人割

〆 九匁五厘

入 三拾七匁八分六厘

○ 去過之分入

入 壹匁

○ 被下米代

# 阪神淡路大震災と山崎町

河本 雅 視

(一)、はじめに

平成七年（一九九五年）一月十七日未明午前五時四十六分、就寝中大きくグラグラと揺れ、三、四秒後一層大きく、建物がメキメキと軋む音がし、今までにない震動を感じた。慌ててとび起き、テレビのスイッチを入れると間もなく東海沖で地震と字幕に出たので二度びっくり、東海で起きた地震がこの山崎でこれだけ揺れるとはただならぬ事と思ったが、しばらくして震源は淡路と訂正され、豊岡・京都震度5と出る。まだその時は広い範囲の情報はずかめていなかったであろう。

夜明けと共に、時間が経つに従ってその被害状況は拡大し想像を絶するものとなっていった。倒壊家屋が次々と燃えていく、その周辺に毛布にくるまった人、パジャマ姿の人、そしてまだ家の下敷きのままの人に大声をかけている人の姿があり居たたまれぬ思いで画面を見つめた。

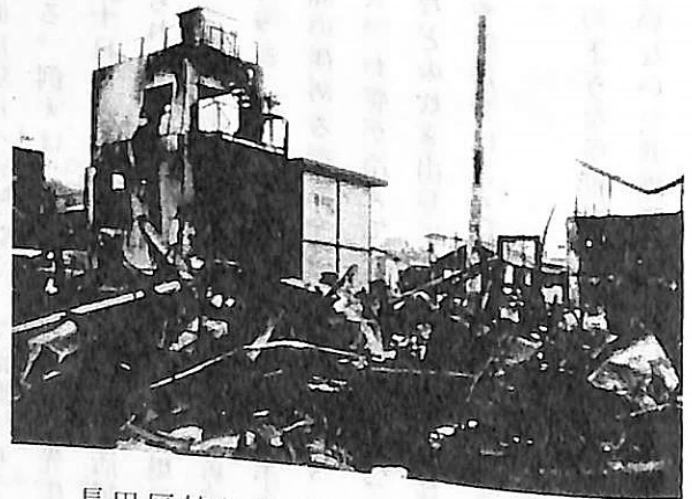
阪神淡路地方の被害が一番大きく、震度7の激震（これは地震で最大級の震度）の直下型地震である。高架になっていく高速道路や鉄道は崩落し、或いは横転し、ズタズタに寸断され、大きなビルも倒壊、古い家屋の密集地は瓦礫の山、あちこちで燃え上っ

ている猛火も水がなく、消防車も来ず、一日中燃えるにまかせた状態で皆茫然と立ちすくんでいた。

海に近いのに、空から、海から水を送って何とかならぬものかと歯がゆい思いでその成り行きを見守るだけであつた。

(表 I)  
兵庫県南部地震の規模と被害状況

発生時	平成7年1月17日 午前5時46分
震源	淡路島北端
マグニチュード	7.2
震度	7 (最大級の震度)
死者	5,502人
負傷者	34,626人
全半壊家屋数	159,544棟
避難者数	21万人 (一時32万人)
避難場所数	1,239
被害額推定	約10兆円 (山崎町予算 約100億円の1千年分)



長田区被災地 (平成7.3.14 筆者撮影)

(二)、救援活動

この悲惨な状況をテレビ等で見た山崎町の人々はどう対応したであろうか。

災害の状況、被災者の状況が次々とテレビで報道され、その報道を見ていた人達は人ごととは思えず誰もが救援の手を差し伸べようとした。

身近な例でいうと、震災の翌日講座日であった老人大学では、生活の基本である電気・水道・ガスというライフラインは壊滅のため、食物も水もなく、そのうえ一月の寒空に慄えている人達を思い、私たちに何か出来ることを皆さんに呼びかけようと役員で相談した。

先ず炊き出しでおにぎりを作り、それを被災地へ、との案が出た。しかし、どうして運ぶかである。道路は寸断され、使用可能の道路は大渋滞との事、ヘリコプターを頼めないか、パトカーで先導してもられないか等の意見が

株式会社  
安井書店

90山崎町山崎郡粟六  
TEL山崎②0700(代)

出、役場へ頼みに行ったが、それでも個人で、自分の車で米・水等を持って行って炊き出しを、と言って来ておられる方もあり、誰もが救援の手をと思っているようであった。

結局おにぎりや水は町から送ることになり、老大では義援金を募り、学生の皆さんから三十六万円余りを日赤を通じて送ることが出来た。

このように救援の活動は、各団体を通じて行われ、町内に於ては各地域の自治会をはじめ婦人会、老人会、児童・生徒、そして役場、農協等あらゆる職域、団体、個人から義援金や物資が送られた。

また、救援活動の中には直接現地へボランティア活動として出向いて行った人も数多くある。例えば、町内のある学校の先生の手記を見ると、震災から二十日ほど経った二月六・七日、活動に参加したときの感想が述べられている。それによると、避難場所になつている学校へ行ったが、教室の中は布団や毛布が敷き詰められ、その周りにはポットやティッシュペーパーなど身の回りの小物が所狭しと置いてあり、人間の住める環境ではなかったとか、また、朝はパンに冷たいジュース、お腹が冷えて食べられなかったとの事、温かいみそ汁や食物などの炊き出しに薪を作るにも道具がなく、児童の工作用のノコや手斧ではどうにもならなかったようである。

被災された人達は、このような学校の教室・体育館をはじめ、市役所や公民館等壊れていない公共施設へ、また公園にテントを

張って避難生活を送っており、その数は一時は三十二万人、避難場所一二三九箇所といわれている。これらの人々に少しでも手助けをしたいと全国各地からボランティアに次々と駆け付け活動した。山崎町からの四十日間の救援活動の様子を町広報よりまとめる。と次の表Ⅱの通りである。

(表Ⅱ) 山崎町の被災地救援状況

義援金	21,125,064円
支援物資	
給水車	83台(1日約2台ずつ)
毛布	2,310枚以上
米	50kg
おにぎり	18,140個
炊き出し	3,900食(現地で炊き出し)
日用雑貨品	(タオル・軍手・生理用品・オモチャ・文具等多数)
ボランティア活動(炊き出し等)従事	
	日赤奉仕団、商工会青年部・婦人部、役場、農協、給食センター、学校、社協、各職域、町理容組合、地区婦人会、ひまわりグループ、根心会、その他有志グループ

(三)、山崎断層は大丈夫か  
地震が起きると問題になるのが活断層である。今回の阪神大震災に於ても、どの断層が動いたかが学者の間で問題になっている。震源地になった淡路島では、野島断層があり、地震直後地表面にもズレが現われ動きが証明された。一方、神戸周辺にも六甲断層系がたくさんあり、これらが動いた可能性があると見ているが、こちらは地表には現われず、どの断層が動いたかわからないよう

である。しかし今回の地震では、野島断層が最初に動き、次々と三つの断層が動いた事が世界各地の地震計の記録からわかったようだ。

また、被害を大きくした理由としてM7.2の直下型地震であった事は勿論であるが、場所によって差が出ているのは、被害の大きい帯状地域の直下にまだ知られていない断層が動いたとする説や、断層は六甲山側の既知の断層が動いたが、基盤が傾斜しているため地震波が増幅された場所に被害が集中したという説がある。また、被害の大きい地域を調査すると、昔、谷すじや湿地を埋め立てた軟弱な土地や、沖積層に多いことが上げられている。つまり地盤や地形により被害に差が出たようである。

特に今回被害を大きくした理由として、今までにない縦揺れの上下動が予想を大きく上まわったため、設計強度より大きい力が加わり、ビルや橋脚等の被害が大きくなったとも言われている。これら

きれいなカラープリントの店



Specialty Camera Shop  
**コーエーカメラ**

本店 宍粟郡山崎町東鹿沢26-3 ☎62-2089  
フリーダイヤル ☎0120-440-990  
FAX0790-62-7429  
咲ランド店 TEL0790-63-0533

の問題は今後も論争され解明されるであろう。

ところで、山崎町で気になるのが山崎断層であるが、山崎町ではまだ記憶に新しい地震がある。

昭和五十九年（一九八四年）五月三十日午前九時三十九分、マグニチュード5.6震度4の地震が三回続き十回ほど余震が続いた。役場や小学校校舎では壁にヒビが入ったり、窓ガラスが割れるなど町民をはじめ西播一円の人達を驚かせた。

この地震は、西播中心に強い地震、という見出しで大きく報道され、山崎断層が一躍有名になった。この時の震源は山崎断層系の一つ、安富町植木野

付近の暮坂峠断層であった。地下一七・八kmのところ

で動いたのである。この山崎断層系は岡山県津山盆地の北東から東南東に延び、山崎町を通り三木市付近まで延びた長さ八十kmの断層系であり、丁度中国自動車道に沿って延びている日本でも有数の活断層である。約二百万年〜百万年前か

おくすりの相談と処方せん受付

# ごころ薬局

薬劑師 岸本 八重子  
薬劑師 岸本 弘子

山崎町東和通り・☎(0790)62-1190

ら動き現在まで百m〜二百mずれている。(M7級の地震では一回に一、五〜三mのずれが生ずるということである。)

その証拠は、上空からの地形を見ると山の尾根が断層と思われる所でくの字に折れ曲がっていることから分かる。山崎町から福崎町にかけて中国道や県道が通っているが、ここは断層によって出来た地溝に沿って造られた道路であるが、ここを通るとき南側の山の尾根を見ると尾根の途中で向う側が左にずれてくの字になった地形が見られるが左横ずれ断層であることがわかる。

ところで問題はこの山崎断層が今度いつ動くかということであるが残念ながらそれはまだわからない。ただ過去の歴史を見て大体の周期を掴むことが出来る。

それによると、先ず歴史上の記録では、八六八年に播磨の国に大地震があったようであり、これが山崎断層によるのではないかとされている。また、トレンチ法といって発掘によって地層を調べ地震の痕跡を知る方法でも八六八年の大地震と一致したとされている。さらに深い古い地層からも痕跡が認められ、その時間間隔は千年程度とされた。だとすれば八六八年から現在まで約一千年余り経過しているので近い将来、次の地震が起る可能性は大きいとされている。

また一方、この山崎断層の地震活動の研究であるが、これも昭和四十年から地震計が設置され記録が続けられている。特に昭和五十年中国自動車道建設に当たり、安富町春に中国自動車道地下八mの所に長さ四十五mの二本のトンネルが作られ、地震計等の



精密計器を設置し、地震予知の研究が始まった。ここでは地層の動きを把握し、データは宇治市にある京都大学防災研究所に送られ、地震と断層の動きとの関係をさまざまな角度から研究している。これまでにわかった事は、地震予知につながる前兆現象が発見され予知の可能性が示された事である。今後に期待したいものである。

このように予知はまだ研究中であるが、山崎断層による地震はM4.5の中規模クラスでは、約十二年間隔という事であり、M7クラスの阪神大震災級の地震は約一千年間隔ということである。今日次の地震が起きても不思議ではないと警告している学者もあるので今回の阪神大震災を教訓に地震に対する備えは十分しておく事も大切と思われる。ただ地震予知はまだ難しく、現在はまだ出来ないということであり、忘れた頃にやって来るのかも知れない。

(四)、あとがき

震災から二ヶ月経った三月半ば頃、神戸を訪れ被災地を見舞った。そこで感じた事は災害の規模の大きさに驚く。自然の猛威、恐さ、たった二十秒ほどの間の破壊力を思い知らされた。

現地では、倒壊したビルや家屋、瓦礫の山、無惨な焼跡、そして立ちこめる臭気が、土ぼこりが、三六〇度身の周り全体から五感を通し迫って来る。視界四〇五度のテレビとは比較にならぬ実感が伝わり、ただ茫然とする。しかし、その中で被災された方々に声をかけてみると、打ちひしがれた様子はなく、明るく前向き

の姿勢でいられるのに胸を打たれた。

災害発生当時、あの修羅場の中での冷静な行動に世界中の人々が感心したと報道されたが、避難生活の中に於ても助け合い、共に立ち上がろうとしていられる姿に感動した。焼跡の残骸を取りのけた一角でタコヤキを始めた人達の話から、そしてまた、小学校の教室で避難生活を送っている六〇〜七〇歳ぐらいの女性の方々の話から「もう失ったものに未練は感じない。ただ、これからもこの土地で皆と一緒に生活していきたい」と話された事が耳に残っている。生死を共にし、苦楽を共にしてきた人達の堅い絆を感じ被災地を後にした。

大自然の威力の前には弱い人間ではあるが、心の持ち方で強くもなり弱くもなる。相互扶助の精神、隣人愛の精神こそ大切ではなからうか、と思う今日この頃である。



# 義人時朝公の追悼詩

小川 登

随分御無沙汰を致しました。郷土会報などでお活躍の御様子を拝し大変嬉しく存じておりました。毎回楽しく拝見させて頂いております。有難うございます。

偕、本日お手紙を差し上げたのは外でもございません。「義人時朝五郎左エ門」公の追悼の詩を作りましたので、郷土会報にも載せて頂けたら等と考え送らせて頂きました。何卒宜しくお願ひ申し上げます。

## 義人時朝公追悼詩

七言絶句仄起真韻

賢士智謀護衆民

賢士の智謀 衆民を護り

高論制誹斬慈仁

高論 誹を制するも 慈仁は斬らる

無辺遺徳廟前馥

無辺の遺徳 廟前に馥しく

西嶺老杉語大倫

西嶺の老杉 大倫を語る

賀尉小川登作

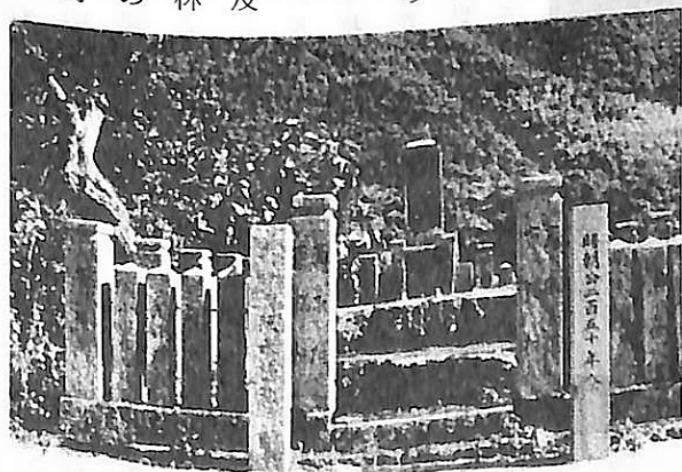
「真韻」 民仁倫

## 解説

勝れて賢い人物(時朝公)の、人の為になる良き考えと謀(ここでは時朝公の献言)によって、山崎藩の多くの住民(高下・市場の人)の権利が保護された。次元の高い議論は、人をそしるような低劣な申立を抑えた(西山一帯を三日月藩領とする幕府の裁定が時朝公の正論によって覆された)が、思いやりがあり、慈しみ深い、仁徳の士は命を落された(時朝公の献言は正しかったが、幕府の裁定を覆した罪は重いととして、公は斬罪に処された)時朝公の限り無く宏大な遺徳は、二百七十余年を経た今日に於ても、公の墓前に絶えることの無い香華のように、馥郁とした香をただよわせている。西山の嶺々にそびえる杉の老木は、大きな人の道の立派さを何時までも人々に語りかけ続けて行くことである。

## 語釈

- 一、西嶺Ⅱ(にしやま)高下及び市場の部落有林並に菅山振興会の山林等(推定一千町歩余)のある山。



- 二、時朝五郎左エ門は享保五年（一七二〇）船元河原で処刑された。
- 三、公の墓碑は西山（山崎藩領）と本郷峠（三日月藩領）と船元（処刑された地）の三地点の見える台地に立てられ、毎年地域の人々によってお祭りが行われた。山崎藩からも米一俵が祭祀料として交付されたと言う。現在も十月一日が時朝会として、高下、法傳寺に於いて法要が行われている。
- 四、慈仁Ⅱいつくしみ深く、情け深い事、仁は徳のある人の意でもある。
- 五、無辺Ⅱ限り無く広大なさま。



## さざなみの滋賀の湖岸を訪ねて

岸 本 正 理

今回の研修旅行は、京の都に近く天智天皇の大津京もあったところで、昔から歴史上のドラマもあり文化も栄えた琵琶湖畔を訪ねた。

当初の予定を変更して、三井寺↓滋賀院門跡↓旧竹林院↓日吉大社↓京阪レークセンターハウス（昼食）↓岩間寺の順で参拝や見学をした。

バスガイドさんの説明を快く聞きながら快適に走る名神高速道路のバス旅行を楽しんでいると、はや京東インターチェンジへきた。時計を見ると九時十分。山崎を出たのが七時三十分だから一時間四十分で着いたことになる。

### 【三井寺】

正式の名称は、園城寺（オンジョウジ）というらしい。仁王門に入る所の大きな石碑に園城寺と刻んであった。この寺は、天台寺宗総本山である。創建は、おおよそ一三〇〇年前のものだが現在の金堂は、秀吉の正室北政所の寄進によって一六〇〇年に建てられたもので約四〇〇年前のものである。

本町の高野薫さん（研修部）は、俳句の趣味豊かな方で、「三井寺の仏巡りて秋一日 薫風」と詠まれた。

数々のお堂を巡り、最後に歌で有名な三井の晩鐘の所へくると眼前がパット開けて、琵琶湖が一望できた。明治の漢詩人大江敬香は、その作『近江八景』のなかで、

「三井の晩鐘勢多夕べ征人容易に郷愁を惹く」

と詠じている。征人は、旅人である。湖上きらめく夕景の美しさに感動を覚えたのであろう。

【滋賀院門跡】

明暦元年（一六五五）後水尾天皇より滋賀院の号を賜った。三九九年前である。

玄関を入った正面に「一微塵」と、右横書きに黒々と雄大な文字の額が掛かっている。

いかなる小さなものでも粗末にしたり、とらわれたりしてはならないという法語だそうだ。

その他、数々の書、障壁画を説明されたが、いずれも国の重文や国宝級のものばかりで、圧倒されるばかりである。特に私の印象に残ったのは、加藤景雲作の伝教大師のご尊像である。その神々しいお姿に感動を覚えた。

写真は、その時ノーフラッシュで写させてもらったものである。

高野薫さんは、ここでも

「歴史聞く部屋部屋にあり秋の花 薫風」

と詠んで説明して下さった人に渡された。

【旧竹林院】

ここは、比叡山延暦寺の僧侶の隠居所、つまり里坊の一つで、



昨年四月にはじめて一般公開されたものである。庭を回って大きな一枚ガラスの建具のはいった部屋でテーブルを聞きながら休憩した。庭の池には鯉が泳いで、その池の前には緋毛氈を敷いた長椅子がおいてあり、その真っ赤な蛇の目傘が後ろの松の緑と秋の日差しに映えて美しいたたずまいをみせていた。ただ、テーブルの説明が聞き取りにくかったのは残念であった。

【日吉大社】

西本宮本殿は国宝であり、西本宮楼門は重要文化財である。比叡山の荒法師共が神輿をかついで強訴におよび京の都を暴れ回ったことはあまりにも有名。

【京阪レークセンターレストハウス】

食事が遅くなつて、ここで一時二時まで昼食をとる。その間、会員の人々はお土産を買ったり、辺りを散策していた。ここは、かの有名な観光船ミシガンの発着場である。おりしも、ミシガンが美しい船体をみせてはいつてきた。

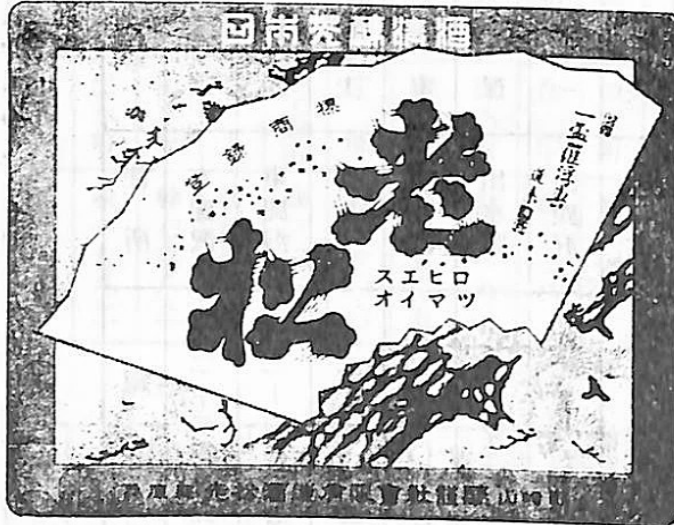
【岩間寺】

この寺は、石山寺の西南方向で、滋賀県と京都府の境にあるが通り抜けはできない。京滋バイパスの側道を通り、途中で右へ曲がり、くねくねと山道を登り、高さ四四〇呎の山頂へ行く。そこに西国第十二番霊場の岩間寺がある。本尊は、汗かき観音、雷除観音とも呼ばれ、また、ほけ封じの仏ともいわれ、霊験あらたかな観世音菩薩です。

また、この寺の境内には、芭蕉の秀句

「古池や蛙飛び込む水の音」を詠んだ古池が今も残っている。  
〇おわりに

今回の旅行は、会員の皆さんが一名の故障もなく、天気もよし、道路の渋滞もなく、そして、運転手島津悦男さんのすばらしい運転と親切な心づかい、さらにまた、ガイドさんのこまめにお世話して下さった態度に感謝し、すばらしい旅行ができた事を皆さんと一緒に喜びたいと思いました。



呉服とジュエリー

とくさや

本店 本町(さつき通り) 62-1680  
咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568  
〃 2Fジュエリーとくさや 63-0557

平成七年・八年度

役職名	氏名	住所	電話
名誉会長	安井淳三		
顧問	小畑欽之助		
"	庄和夫		
"	壺阪寿		
"	伊藤親保		
"	福山清一		
会長	堀口春夫		
副会長	久保寅夫		
副会長	志水美好		
総務部長	柳田弘		
会報部長	大谷司郎		
研修部長	垣口正信		
史跡部長	志水正信		
事務局長	岸本正理		

役員

役職名	氏名	住所	電話
山崎地区 西支部長	高野薫		
山崎地区 東支部長	仁尾永 <sub>（イ）</sub>		
山崎地区 北支部長	伊野操 <sub>（イ）</sub>		
城下地区 支部長	西村清		
戸原地区 支部長	志水正信 <sub>（イ）</sub>		
河東地区 支部長	織金義雄 <sub>（イ）</sub>		
神野地区 支部長	上野一人		
薦沢地区 支部長	久保寅夫		
菅野地区 支部長	河本雅視		
土万地区 支部長	高畑義一		
監事	志水武雄		
"	谷川道一		



外科・内科

# 山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL(62)0036

## 事務局だより

● 浜御殿と高瀬舟船着場の保存についての陳情

平成七年一月二十七日、町役場建設課長と史跡部伊藤一郎議員と事務局長岸本とで見出しの件について左記のところへ陳情を行ないました。

建設省近畿地方建設局

姫路工事事務所 龍野出張所

出張所長 大杉広徳 様

● 平成七年度の定期総会は、記帳して下さった方で二十九名、記帳されていない方を併せて約四十名の方々の出席があり、例年になく盛会でした。